
神凧町奇想譚

瀬河ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神凧町奇想譚

【Nコード】

N3174Z

【作者名】

瀬河ナツ

【あらすじ】

親が死に、妹と町から逃げ出した少女。家出の中でさまざまの人に出会い、学び、成長していく物語。どちらかといえばシリアスが多くなりそうな物語が今始まる。

この作品は恐らく多重クロスです。そういうが苦手な人はブラウザバックを押してください。でも、一回でも読んで下さるとうれしいです。

プロローグ（前書き）

ようやく完成しました。いろいろとツッコミ所はあると思いますが
やさしい目で見守ってくださいとありがたいです。

プロローグ

ぞあ ああ ああ

鬱陶しい程に雨が私達に降り注ぐ。それはまるで泣かない私達の代わりに泣いているかのように、私は妹と共に両親が眠っている墓石の前で傘を差しながら突っ立っている。すると沈黙に耐えかねたのか妹が、

「……ねえ、おねーちゃん。おとーさんとおかーさんはどこにいたの？」

と聞いてきた。まだ幼い妹の事だ、私達がここにいる理由が分からないのだろう。それを私は年相応で可愛らしいと思う気持ちと、理解する事が出来ない事に対する羨望だった。妹はこんなにも年相応の子供っぽさを持っているのに、私にはそれが無い。まだ六歳と子供なのにな。だからこそ、私は年相応の幼さを持つ妹が羨ましかった。

「お父さんとお母さんはね、遠いところに行ったの」「とおい、ところ？」

「そう、私達には遠すぎて行けないところに行っちゃったの」

真実を少し濁して妹の質問に答える。我ながら美味い濁し方だと思っ傍ら、こんな事が出来る私に自己嫌悪する。……私も、妹みたいに子供っぽかったらこんな思いはしなかったのに……

「……ねえ、私もちよっと出かけてくるから、友達の家で待つ

ててくれる？」

「……おねーちゃんもどっかいつちゃうの？ おねーちゃんは帰ってくる？」

「……うん、いつか必ず帰ってくるから、それまで待っててね」

そう言っただけは妹を連れて墓場の入り口で待っていてくれていた両親の知人の所に行く。私も何回か遊びに行ったことがあって、この町で神職をしているらしく、両親の葬式の際に妹の面倒を見てくれと言ったら少し渋ったが承諾してくれたのだ。

「……本当に行くのかい？ 前も言っただけどあんたも引き取ったって構わないんだよ？」

その方が友達も増えてあの子も喜ぶだろうし。そう、待っていてくれた二人の女性の一人が言ってくれる。それは完全な善意の元に言ってくれた言葉なんだろう。確かにその言葉は嬉しかったし、受け入れるか少し悩んだ。でも、

「……いいんです。私一人ならなんとかありますから」

「一人ならって、あんたまだ六歳」言っても無駄だよ」……どうしてだい？」

「この子もただ言っただけじゃないと思うからね。きっと何を言っても考えは変えないだろうね」

そう言っただけもう片方の女性が片方の女性を止めてくれた。そして二人して私の眼を覗いてくる。二人の眼には私の眼がどう映っているのか分からないけど、二人の眼に反射した私の瞳は透き通っているけど、意思の籠ってないガラスのような空色の瞳が見えた。

「……なら仕方ないね。でも、何かあったらいつでもこっちに来ていいんだからね。神様は人に救いを与えるのが仕事なんだから」

「そうだよ。あんたはまだ若いんだから。何かあったらいつでもこっちにおいで。妹ちゃんも私達が全力で守るからね」

「……ありがとうございます。では、私はもう行きますね」

そう言っ て私は妹を預け、歩き始める。

そう、この日は妹も、自分の住んでた町も捨てたのだ。ここにいたら両親の思い出に浸って前に進めそうもないから、妹と一緒にいたらいつか大変な事を起してしまいそうだったから、それが怖くて私はここから、神風町から逃げ出したのだ。

「と言ったもの、その前に荷物とか整理しないと……」

とまあ、シリアスにいこうと思ったんだけど、そうはいかず、私は今自分の家に戻って荷物を整理している。この町を出るにしたら、お金とか必要だしね。というか私の口調も性格もさっきと違う？ ああ、これは一人の時の口調で誰かという時はあの口調だよ。

まあ、外用の仮面みたいなもんだよ。

「えーと、まずはお金でしょ、体術や剣術の技術書でしょ、後は…」

そこで、ふと思い出したのかのように私は立ち上がり、父の部屋に移動する。父からは入っちゃダメと言われていたが、その父ももういない。その事を改めて実感し、少し胸が痛む。でも、それを振り切って私は父の部屋をあさり始める。

「……多分ここら辺にあると思うんだけど……あ、あった」

本棚の後ろを探しているところ、手に何か当たるものがあった。それを引っ張り出してみると、なんか棒状的な物が入った袋があった。さらに中の物を取り出してみると、中には二本の刀が入っていた。

「えっと、これだよねお父さんの刀って……？ よっと、って重っ……流石に持つのが限界かな……？ 振るうなんてとてもじゃないけど出来ないや」

試しに手に取ってみるとずしつとかなりの重量感があって持っているのが精一杯だった。でも、背負う事なら出来るかも……そう思って試しに袋に入れて袋の肩紐に両肩を通して背負ってみると、重いけど背負えない重さではなかった為、背負って持っていくことにする。父の部屋にもう用はない為、父の部屋を出ようとして最後に父の部屋に振り向いて、

「……お父さん、お父さんの刀を借ります。返す事はないと思いますけど、大切に使用してもらいます」

そう言って私は父の部屋から出た。といつてもまだやる事はいっぱいあるからまだ家は出ないけど。さてと、次にやらないといけないのは……拠点探しかな？ この町を出るなら誰かの家に行かないといけないし……というか、とりあらず剣術の練習が出来るところがいいかな？ とりあえず両親の仕事のコネを伝ってみよう。

しばらくお待ち下さい

「はあはあはあ、やっと見つかった……お父さん達コネ多すぎですよ……」

うう……さつきは大人なびた性格が恨めしいといったけど、この子供な身体も恨めしい。作業するのも一苦労だよ……せめてどつちかに傾いてくれればよかったのに……いや、六歳なのに大人の体とか嫌だけどね。それはともかく、私が行くべき場所はなんとなく決まった。後はそこに行つて稽古つけて貰えるか頼むだけだ。

「さて、お金よし、本よし、刀よし、行き先の住所よし、後は……一応確認しておくかな？」

そう言っつて私は台所に赴き、包丁を取り出し、意識を集中させる。

それは赤く燃え滾る灼熱の炎。闇夜を照らす明るい光。

「創造 (Briah)」

そう呟くと同時に包丁から炎が放出され始める。……はあ、成功して欲しくなかったけど成功しちゃったか……。そう、これは私が

生まれた時から持っていた能力、『自身が想像した性質を創造し、物質に付加する能力』だ。正直私はこの能力が好きじゃないか嫌いだ。自分の異常性を改めて認識しているみたいだから。自分が普通じゃないと思わせる決定的なものだから。……本当にこの性格も能力もなかったら良かったのに……そうすれば、今も妹と

「……って今更何を考えているんだ私は。やめやめ、準備を終わらせたしさっさと出発しよう。ここにいると負のスパイラルに陥りそうだからね」

とにかくさっさと家から出よう。そう思って荷物を纏めて家を出ようとしたとき、

ざああああああ

……うん、そういえば雨降ってたね。うん、すっかり忘れてたよ……。というかスッゴい土砂降りなんだけど……これは今日出発するのは無理かな……？ うん、明日必ず出発しよう、そうしよう。

「はあ……とりあえず夕飯の仕度しないと……」

完全に出鼻を挫かれて意気消沈気味になってしまった私は速攻で夕食を取って、明日に備えて早く就寝しました。べ、別に悲しくなんかないんだからね！

プロローグ（後書き）

作者の言い訳

主人公の年と口調について、一番は口調を子供っぽくするのがものすごく抵抗があった為、少し丁寧で大人びた感じにした。素は年相応の性格。

とまあ、今回はこんな感じですよ。あと、今回は主人公が結構強い作品ではなく、かなり弱い部類に入ると思います。

次回からは少し進展させていきます。それでは、また次回お楽しみに下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3174z/>

神風町奇想譚

2011年12月11日00時58分発行